

甲状腺外科草子 27

置かれた場所:渡辺和子シスター

杉野 圭三

これまで様々な講演を聞く機会があったが心に響き、記憶に残るものはまれである。

昭和 43 (1968) 年 (当時中学 3 年) ごろに全校生徒 (中高一貫校) 1000 人以上を集め、特別講演が行われた。講師は当時、最年少の大学学長とマスコミの注目を浴びた渡辺和子シスター (1927-2016) であった。



雙葉高等女学校 (1941)



学長就任 (1963)

渡辺先生は昭和 38 (1963) 年、36 歳の異例の若さでノートルダム清心女子大学学長に就任、講演当時は 40 歳前後のはずで、随分若い学長だと記憶している。イエズス会の主宰する学校とはいえ、学生にとって宗教がらみの講演は苦痛以外の何物ではなく居眠りする者が大多数なのが通常の光景である。



渡辺錠太郎教育総監・陸軍大将 (1874-1936)

しかし、その日の講演の冒頭は二・二六事件、その現場を目撃した当事者の証言であった。反乱軍将兵が渡辺邸に乱入した際、渡辺大将は座卓の陰に 9 歳の和子を隠し、拳銃で応戦したが、軽機関銃で狙撃され 43 発の銃弾を浴び絶命した。感情を抑えて淡々と講演された壮絶な内容と運命の非情さに肅然と聞き入るばかりであった。



渡辺大将の陸軍葬



弾痕が残る座卓

渡辺錠太郎大将は家が貧しく独学で陸軍士官学校に入学し首席で卒業、歴史、経済、地理、教育など広範な分野での猛勉強で「学者将軍」と呼ばれるリベラルな中道派の将軍であった。1935 年、皇道派の重鎮、真崎甚三郎教育総監の更迭に伴い、後任として就任したが、この一連の過程で皇道派の恨みを買ったものとされる。この体験が後に聖職者の道を選ぶ契機となったことは容易に推測できる。

渡辺先生は聖職者として、後年反乱に参加した兵士たちを許すことはできても、反乱を煽動、使喚したにもかかわらず、軍法会議では見苦しい自己弁明を繰り返し、青年将校たちに責任を転嫁し極刑を免れた皇道派指導者を心の底から許すことはできなかつたらしい。

「たった一人で父を死なせることなく、最後を看取ることができたのは幸せでした。相手 (青年将校) のご遺族も苦しい思いをしてこられた。自分だけが苦しかったわけではない。人間には戦争を引き起こす力があると同時に、平和を作り出す力があることも忘れてはならないと思います。

当事者ならではの重い言葉である。



「置かれた場所で咲きなさい」、「雑用という名の用はない、用を雑にした時に生まれる」、「不幸の裏側に幸せを見つける」など多くの言葉と社会・教育に多大な貢献をされ、2016 年 12 月 30 日、89 歳で膵癌のため帰天された。

(一甲状腺外科医の徒然なる随想)

2022 年 4 月 20 日